

熊高同窓会だより

編集発行
熊谷高等学校同窓会
熊谷市大原1-9-1
TEL 048(521)0050
FAX 048(520)1057
事務局直通
TEL・FAX 048(528)2333

二つの「有志の会」発足

「熊高森づくりの会」
「熊谷高校を応援する有志の会」

荒川水源の地に悠久の森づくりをして、卒業生、在校生たちが集い、交流を図るとともに、地球環境の保全や水源涵養等に寄与する

谷高生を応援する会が各々誕生し、既に、その事業が展開されている。(本文・2～4面)



おめでとーございます

金子兜太氏(中38回卒 現代俳句協会名誉会長)には、この度の二〇〇八年度文化功労者として政府より表彰されました。

同窓生一同、心よりお慶び申し上げます。

同窓会では先生の受賞を記念し、来る三月十四日(土)に行われる総会終了後(午後二時三十分頃)、先生による記念講演・祝賀会を開催いたします。詳細につきましては総会案内でお知らせしますが、予めご連絡し、多数のご参加をお待ちしております。



平成20年10月13日、素晴らしい秋晴れのもと、「熊高森づくりの会」の記念植樹式典が、長瀬町宝登山の現地に於いて盛大に挙行されました。

当日は、上田清司知事、大沢芳夫長瀬町長を始めとし、数多くのご来賓のご臨席をいただき、更には、なんと、500名余の同窓の皆さんも参加され、森づくり会発足への関心の深さを

物語っております。熊高の森は、宝登山ロープウェイ頂上駅直下(標高450m)の1・4ヘクタールの伐採地です。ヤマザクラ、コナラ、ケヤキ、そして熊高の木ノキ等100本の苗木が同窓生一人一人の手によって植樹されました。

植樹終了後、徒歩にて下山、宝登山神社大駐車場をお借りして、地元関係者の



校長、高20回卒 高橋 丘

活力ある進学校を目指して

同窓の皆様方には、日頃から母校熊高に、一方ならぬご理解・ご支援をいただき、ありがとうございます。熊高高校も創立百十三年の伝統を引き継ぎ、生徒教職員共々元気に頑張っております。

去る十月十三日、「熊高の森づくり」記念植樹の式典が上田知事ご臨席のもと

行われました。この取組が埼玉新聞やテレビ埼玉でも報道され、熊高の元気なイメージが広く地域に伝わり、大変有り難く思っております。本校の伝統的な学校行事の四十キロハイイクと関係の深い長瀬の宝登山麓に「熊高の森づくり」という壮大なプランが始まったことは、在校生

や同窓の皆様方さらに地域の方々との交流が深められ、将来的には本校の教育活動に大変プラスとなり、意義深いものとなるものと期待しております。

また、同窓の有志の皆様のご支援による紫雲塾講座が今年から始まり、三年生を中心に河合塾の講師が本校で講義を開講しております。

定時制の近況

教頭 吉住 和人

同窓生の皆様におかれましては、ますますご清栄のことと喜び申し上げます。現在の定時制の様子等についてご報告いたします。本年度は在籍生徒数七十名でスタートしました。四月には新入生二十七名を迎え、好天の中、定時制らしい温かい入学式を挙行することができました。

主な行事としては、六月、初めての試みとして、熊谷ハローワークとの連携の下、全校生徒参加の職場見学会を実施しました。太田の富士重工株式会社群馬工場と坂戸の明治製菓株式会社関係工場を訪問しましたが、生徒達は初めて見る大企業の仕事を興味深く見学していました。九月の文化祭でも初めての試みとして女子生徒が全日制に混じってステージ発表をさせていただきました。授業終了後の九時から熱心に練習していましたが、その成果を十分出すことができた満足そうな表情が印象に残っています。

また、「定時制美術館」と名付けた展示室を設け、写真部と美術・陶芸部の作品を展示しました。例年以上の充実した作品展となりました。十月には富士急ハイランドへの遠足を実施しました。四年生にとってはよい思い出づくりになったと思います。

部活動は今年度、バドミントン部、サッカー部、野球部、写真部、美術・陶芸部、音楽部が活動しています。顕著な実績としては、一昨年に続きバドミントン部の園本さんが埼玉選抜の代表に選ばれ、全国に出場しました。写真部では三年生の石坂君、山ノ内さん合の写真及び石坂君の写真が県高校写真展で優良賞に選ばれました。石坂君はさらに熊谷市「うちわ祭り写真コンクール」でヤングマン賞を受賞しました。また、県下の定時制高校で唯一本校写真部だけが高校総体の

記録係に選ばれました。昨年度の卒業生は十二名です。進学が二名、就職が十名。ニートやフリーターは「0」です。これは誇れることだと思っております。全員がそれぞれの夢に向かって果立っていきましました。最後にこの卒業生の一人をご紹介します。たなかまは自動車を整備士になる夢を実現するために二十七歳で入学してきました。学校に通うため、それまでの安定した職を辞しました。しかし、彼には養育すべき妻がいます。そのため、朝三時から新聞配達、帰宅

してからの登校するまでガソリンスタンドの店員という生活を四年間続けました。その中で野球部を四年間続け、四年時には主将、そして生徒会長も務めました。定時制の部活動は授業が終わった九時からです。一体いつ眠っているんだろうと私たち職員の間でも不思議でした。彼は今、夢の実現に大きく踏み出し、自動車整備の専門学校に通っています。彼の勤務態度が認められている新聞配達店から評価され、特別配属の下で新聞奨学生として生活しています。

変則染みの深い長瀬の地であります。そして今回熊高の森づくりを長瀬の地を選んでごときたその絆が深いものと思っております。地球環境の保全や水源涵養に寄与することを目的とする本事業は、ご健やかな同窓生の森づくりボランティアグループの活動が、その始めであつたと言われます。数年にわたる地道な努力の積み重ねと、関係各位の情熱が、本日、念願の植樹祭の開催にまで至ったものであると思っております。

長い間、同窓会活動の活性化が望まれておりましたが、熊高の森づくり会のような同窓活動の新しい流れは、その活性化につながる素晴らしい事業として、今後、多いに注目されてゆくことは、言うまでもありません。また、本年三月には、「熊高高校が県民から信頼される公立進学校としてより確かな地位を構築すること」を目的として、熊高大学進学を志望する熊高高校生を応援する「ため、大塚陸毅(高13)、八木橋宏純(高13)の両氏を共同代表世話人とした「熊高高校を応援する有志の会」が発足しました。

紙上でも取り上げられてきました。発起人一同の精力的な活動により早くも軌動に乗り出していることはご同慶の至りです。両事業は今後も更なる発展をめざして継続していくわけですが、同窓生諸兄には相変わらずのご理解・ご協力を賜り、「有志」の輪を拡げるためのご尽力も併せてお願い申し上げます。最後に、今日まで、ご多用の折にもかかわらず尽力いただきましてスタッフの方々はじめ関係各位に改めて感謝申し上げます。挨拶に替えていただきます。

熊高の森づくり 記念式典開催される

秋晴れの十月十三日(月・体育の日)、長瀬宝登山麓において、上田清司埼玉県知事をはじめ多数の来賓各位をお迎えし、地元の方々のご協力のもと、約五百名の参加者共々、記念式典、植樹、祝賀会(芋煮会)が盛大に、しかも、和やかに開催された。



写真右下・ロープウェイ山麓駅

中央上・山頂駅

頂上駅左下が植樹場所

撮影・岩田省三氏(高9寄居支部長)

2008・5・27撮影



モミジ (長瀬町の木)



ケヤキ (埼玉県の木)



クヌギ (熊高の木)

熊高の森づくり

平成二十年十月十三日、熊高の森づくりが長瀬町宝登山でスタートした。熊高OBに在校生、家族、地域の人々も加わり総勢約五百人により、ヤマザクラやイロハモミジなど約千本が植樹された。

今後は、お話が届いていないOBの皆さんに「熊高の森づくり」についてお伝えし、OBのみならず法人の入会活動を強化する。伝統行事の四〇キロハイクなど在校生との連携強化への模索、補植や下刈りなどの育樹祭の開催などの活動を進めることにより、全国に誇れる「熊高の森」が目指される。

「熊高の森」のあらまし

将来図 別図参考

目的 校歌にもうたわれた荒川の水源の地に悠久の森づくりを行うことにより、熊高に学んだ卒業生や在校生及び地元の方々の交流を図るとともに、地球環境の保全や水源涵養等に寄与することを目的とするもの。

場所 長瀬町宝登山の町管理地一・四四ヘクタール

植栽 写真参考

活動案 補植や下刈りなどの育樹祭の開催、入会活動の強化、四〇キロハイクとの連携など在校生との交流など

これまでの経緯

平成十八年度 和名倉山など秩父の山で植林に取り組みグループが活動する中

「荒川の源流から河口まで流域の百か所に百年の森ができる」といふ。荒川流域には幾つもの高校がある。地球温暖化防止のために熊高が立ちあがらなくてはならない。熊高の森をつくろう。世の中に動きかけた。い。この話が熊高OBから投げかけられた。同年度のOBたちの間で連絡が取り合われはじめた。

平成十七年度 大澤芳夫氏(高5)は関係者に熊高が森づくりを行うなら、宝登山の一角をフィールドとして提供する用意がある。旨を表明していた。

大澤氏は長瀬町長として、宝登山を花や紅葉が一年を通じて楽しめる場所にしようという四季の丘構想を進めていた。

長瀬は天下の景勝地。熊高の伝統行事の一つである四十キロハイクのゴール地でもある。フィールドが宝登山であれば校歌に歌われた荒川の水源の一つである。それに鉄道でも自動車でも多くの参加者が期待できる。さらに、電車の中からも国道からも、ロープウェイからも一望できるなど最適な箇所である。

その場所は、終戦直後、植林されたヒノキやスギが契約に基づいて伐採された山林。町では、約三百人の地権者から一括借り上げて管理すべく調整に努めた。

平成十九年度 島野直氏(高7)は笠原英俊氏(高7)とともに前埼玉県議員として、準備会の人たちにアドバイスを行った。

①熊高の森をイメージできる植樹計画を作成すること。②実行組織を整備すること。③発起人はできるだけ多くの人を募ること。④植樹祭に向けた大まかなスケジュールを示すこと。⑤OBも在校生も寄ってみたい。なる森にすることなど。

平成二十年一月 これらのアドバイスに基づいて作成された計画原案に対し、同窓会長の森健氏(高3)は、同窓会事務局の長野順一氏(高7)とともに、課題を話めた。

①熊高の森づくりは同窓会事業の一つに位置づけ。②実行委員会方式を進める。③予算は「熊高森づくりの会(仮称)」入会金と各種助成制度の補助金等で賄う。④入会金は一口五千円で一口を目処に、より多くの会員の参加を目指す。⑤初年度の予算は五百万円とし、今秋、植樹祭を開催する。⑥地元支部との調整を十分に図る。⑦熊高OBの県職員はできる限り事務方を担当する。これらの課題解消案を確認した。

三月五日 同窓会役員会で森づくり計画の概要が説明された。直ちに採決され「同窓会として全面的にバックアップする」旨が決議された。そのまゝ、総会で森同窓会長から計画案が報告された。承認された。

同窓会の各支部では活発に打合せの会合もあつた。各支部から逐次発起人の推薦書が次々に事務局に寄せられた。発起人は総勢三百七十五人になった。

五月五日 各支部から推薦された幹事による準備会では、

①熊高の森の「熊高」は校歌とおり「くまこう」とすること。②法人企業からの寄付を念頭に会則は「入会金、随時会費、寄付金及びその他の収入」とすること。③会の趣旨や入会方法などが一枚でわかる入会案内を作成すること。④専用の振込用紙も作成すること。

⑤支部ごとのフォルマは決めないこと。⑥植樹祭は今年の十月ころ開催に向けて調整することなど、が話し合われた。

七月五日 設立発起人会を開催。会場のくぬぎ会館三階ホールには定員を超える八十八人のOBが集まった。議案は①森づくり計画案、②会則案、③役員案が円滑に決定された。この結果、名誉会長に大塚隆毅氏(高13)、会長に八木橋宏純氏(高13)、副会長には武田茂夫氏(高10)、藤間憲一氏(高16)、江利川毅氏(高18)の三氏が選出された。ここに、熊高森づくりの会が誕生した。

乾杯は、金子千侍氏(中46)の発声により、森づくりの成功を祈り秩父源流水で行われた。

各界を代表して、埼玉県議会の竹並万吉氏(高10)、熊谷市長の富岡清氏(高23)、熊谷高校校長の高橋丘氏(高20)、同窓会長の森健氏(高3)と、森づくりへの期待に満ちた挨拶がなされた。また、さいたま支部の稲垣晃氏(高10)、東京熊高会

の依田英男氏(高18)、深谷支部の滝澤常昭氏(高13)からは支部の取組状況が発表された。

受入地の長瀬町からは、長瀬町長の長瀬芳夫氏、全国インストラクター会会長の岩田洋氏(高4)、熊高の森づくりの発案者の一人である野澤和夫氏(高18)、秩父鉄道(株)社長の荒船重敏氏(高15)が熱烈歓迎の意向を熱く語った。

この日から、九月末までに五百万円目標を掲げ、入会活動が各支部で活発に展開された。

九月七日 現地打ち合わせ会を開催。

九月十一日 八木橋会長、武田、藤間の副会長が埼玉県庁に上田清司知事を訪ね、「熊高森づくりの会記念植樹式典」への出席を要請した。知事は「記念

植樹には喜んで出席させていただきます。熊高の森づくりのような活動が全県下に広がることを願っています。」と応えた。

「熊高の森」予定地の整備は農林公社森林局や秩父農林振興センターが、芋煮会の調理などは地元商工会青年部が中心となって進めた。OB企業では、(株)オリケイがエコ食器を、下妻液化ガス(株)及び(株)飯島プロパ

ンが芋煮会用の器具と燃料を無償提供していた。また、秩父鉄道(株)では熊高の森のロゴマークを付けた特別電車やロープウェイを運行するなど様々な御支援をいただいた。そして何よりもOBたちが、地元長瀬町の皆さんの全面協力をいただき、運営体制を整え準備に努めた。



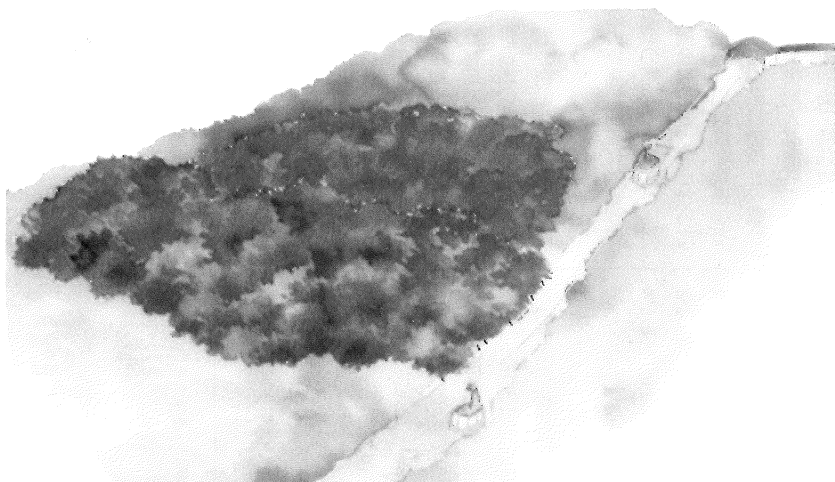
記念植樹式典

十月十三日

「熊高森づくりの会」記念植樹式典」が夏の日差しを感じさせる青空のもとで、上田知事をはじめ多くの来賓を迎え盛大に挙行された。

在校生を代表し、生徒会の今井哲二君は「次の森づくり活動にはもっと多くの仲間と参加し、後輩たちもしっかり引き継ぎ世代を超えた、豊かな『熊高の森』にしたい」と思い、今後の森づくり活動を予感させるものとなった。

祝電は富岡清熊谷市長のほか、「熊高の森づくり」はネイティブアメリカンの言葉『自然は子孫から借りているもの』の精神を思いま



将来図



小林真氏(高13)のデザインのロゴマーク

夫妻からも寄せられた。

熊高の木クヌギは八木橋会長、埼玉県の木ケヤキは上田知事、長瀬町の木モミジは大澤町長によって植樹された。

式典に引き続き、祝賀会が開催された。熊高OBで構成されたおやじバンド「ビートルズ」によりビートルズナンバーと熊高校歌が演奏された。また中津芋の味噌田楽、地元食材で調理された芋煮に参加者は舌鼓をうった。今後の楽しい森づくり活動を予感させるものとなった。

熊高の森づくりに寄せて



埼玉県知事

上田 清司

熊高の森づくりが平成二〇年一月二三日、天下の景勝地、「長瀬」でスタートされたことを心からお祝い申し上げます。

八木橋宏純会長をはじめとする「熊高森づくりの会」の皆様には、青春時代を過ごされた母校である熊高高校を想い、熊高の森づくりに熱心に取り組まれていることに心から敬意を表します。

さて、首都圏に位置している本県は高度経済成長期以降、急速に開発が進み、人口が大幅に増加しました。過去三十年間で消失した平地林の面積は六五〇〇ヘクタールにも及び、山手線の内側の面積に匹敵します。

私はこれを復活させなければならぬと考え、森林をはじめとするみどりの再生に力を入れています。森林はきちんと手入れをしてこそ、きれいな水や空気を育み、災害を防ぎ、私たちの暮らしを守ります。県民共通の財産である森林は、県民全体で支えていくことが必要です。

そこで、その原資とするため県民の皆様からの御寄付とともに自動車税の一部を財源とする「彩の国みどりの基金」を創設しました。二酸化炭素を排出する自動車の所有者に二酸化炭素を

ごあいさつ



熊高森づくりの会

会長 八木橋宏純

「熊高森づくりの会」記念植樹式典」が、平成二〇年一月二三日、上田清司埼玉県知事をはじめ、多数の皆様御出席を賜り盛大に開催できましたことにお礼申し上げます。

また、長瀬町、秩父鉄道株式会社、地元長瀬町の皆様に御協力をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。

さて、私たちの熊高森づくりの会は、多くの皆様から御意見や御提案をいただき、二つの目的により設立することになりました。

一つは、地球温暖化の防止など、地球環境の保全に貢献すること。

もう一つは、OB、在校生、地元の皆様との交流を図ることです。これらを目的とした森づくり事業の推進につきましては、同窓会で機関決定をしていただきました。各支部では入会勧誘など活発な活動をいただき、現在、当初の予定額を超えるまでにになりました。これもひとえに、会の趣旨に御賛同いただき、入会いただきました皆様方のおかげでございます。こうして、熊高の森づくりが、熊高高校の伝統行事である四十キロハイイクのゴールとして縁のある、「長瀬」でスタートする運

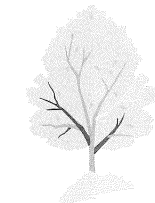
びとなった次第です。この森づくりでは、上田知事、大澤町長と森づくり協定を締結させていただきました。

上田知事のお考えもあって、埼玉県から植樹や育樹の技術指導とともに用具の貸与などの御支援をいただくことになりました。

長瀬町からは森づくりのフィールドとして用地の確保についてお世話いただいております。

私たちの活動に全面的に御支援いただくことに感謝申し上げます。

今後は、御家族や御仲間と「熊高の森」に足を運んでいただくことによって、豊かな森となります。この「熊高の森」第一号地を全国に誇れる悠久の森となるように育ててまいりたいと存じます。さらに、会員の増強に努め、この輪を広げることによりまして、「熊高の森」の二号地、三号地へと進めたいと存じます。今後とも、皆様方の絶大な御支援をよろしくお願い申し上げます。



オオヤマザクラ



ヤマザクラ



ウリハダカエデ



ホオノキ



エゴノキ



ヤマツツジ



イタヤカエデ



イロハモミジ

同窓会寄稿

本気で、みんなで「森づくり」

高45回卒 森田 俊和

十月十三日、青く澄み渡った秋空の下、長瀬の宝登山にて行われました「熊高の森づくりの会」記念植樹に参加しました。八木橋会長、上田知事をはじめ、先輩諸兄、そのご家族の方々と共に、汗をかきかき、クヌギやモミジ、ケヤキなど、馴染みの深い木々を植えてまいりました。

二期目となる上田県政は、「みどりと川の再生」を最重要課題ととらえ、全県下において、あらゆる形で緑化を進めています。中でも、私たちの生命の源であり、防災や教育といった効果も期待できる森づくりは、今最も熱く、しかも根源的な取り組みだと言えそうです。

先の定例県議会において、私は知事に七百万県民と同じだけの植樹、つまり七

忘れたき日

高8回卒 中島 泰雄

熊谷高校にはいい思い出がひびくも無い。その三年間は私にとって忘れたき日々であった。ところが最近、母校に吹く風が北から南に変わりつつあるようである。人生七十年、古稀を迎えてようやく見えてくる景色もあるらしい。

妻沼中学校から入学したのが昭和二十八年である。たまたまその二年前に熊高野球部が夏の甲子園で勝ち進み、決勝戦で京都平安高に惜しくも敗れるというハ

も驚いた。妻沼にはまともな英語の先生がいなかったから、高校英語のレベルについていけない。数学の間も苦悶の連続で、「おい、中島、次の問題を解いてみる」と指名されないよう、逃げ隠れするのに必死であった。マッメな少年はそれなりにマッメに予習復習に努めたつもりであったが、成績はほとんど上がらない。いつも何かに追いかけられているようで、ゆったりと青春を謳歌したなどという記憶は一片もない。

卒業後は、灰色のその三年間と縁を切ろうとした。母校は訪れない。「同窓会だより」は読まない。同窓会には参加しない。実際、熊高をすっかり忘れ去っていても、生きるのに何の支障もなかったのである。いま、定年退職となり、横浜に小さな家を建て、子どもが独立して妻とふたり暮らし、好きな絵を描いてのんびりと生活をしている。すると過去を振り返ることが多くなる。ひたむきだった高校時代も懐かしい。そして、ふと気がついたのであるが、私はあの三年間に得た知識の上でその後の実社会を生きてきたのではあるまいか。

これまでは中学校レベルの知識だけで生きてきたが、大学では議論をしたり総合したりはしたが、努力して知識を仕込むことはなかった。すると、私の知識のほとんどは高校時代のものだ。好きだった地理、歴史、古文はもちろんだが、嫌いだっただけで物理、化学なども、そこで

の授業がなければ私は一生触れることがなかったであろう。無理矢理にでも押し込まれたそれらの基礎知識のおかげで、私は何とか世の中を渡って来られたのだ。ある作家の言葉に「苦しいときは伸びている」というのがある。伸びているときは苦しい。忘れたいほどの高校時代だったということは、実は有難い日々だったのだ。女つきの男子校だったのも今から思えば感謝すべきことだったのかもしれない。そう気づいたあと、私はようやく同窓会に進んで参加するようになった。「同窓会だより」に原稿を寄せる気持ちにもなっている。

短歌コーナー

追懐

中40回卒 今井 素道

入学は昭和九年校長は岡田氏、担任斎藤氏なり。制服に二中の記章輝きて一里余の路靴音聴し

俳句コーナー

高22回卒 柴崎 貞夫

新涼や 敵の勝利の

父母は無し 生家の跡や

日向葵や 悲願の金の

欠場の 選手の手 百日紅

野分来る 斃れ狸を

二つ見る

紅葉や 命のディーナ

同窓会

開催案内

「赤いらかの会」を開催

高3回卒 柳瀬 卓也

去る六月一日(日)十一時から東京銀座のレストラン「高松」に於て、「赤いらかの会」が恩師松丘富雄先生、会員三十三名の参加を得て開催された(此の会は昭和二十一年当時、旧中二年四組担任の松丘先生(漢文を中心としたグループ)定期、柳瀬卓也幹事の司会による開会、恩師・同期物故者への黙祷、吉田信美会長の挨拶、乾杯の音頭は出席回答到着第一号の増田次昭君が取り、山下統光会計幹事の要を得た会計報告を経て暫時歓談となった。

頃合い良く、松丘先生から八十代半ばとは思えぬ張りのある声と姿勢でのご挨拶の中で先生は「私は短い教員生活の中で諸君と接し、その君実業界に転じ今日に至るも、常に私は教師で在ったのだ」と云う自戒と誇りを、一日と雖も忘れたことはない」とその矜持を披露され、一同に往年の熱血授業振りを髪髯とさせて感銘を与えたが、これは後に発覚した、某県教育界の狎官運動の醜態当事者達に聞かせたい、正に金言であった。

次いで各テーブルより一名宛選出され、それぞれ特色ある発言の中で、つい最近自著「ヘルボックス」(注 廃活字抜入箱の意)を下梓した長谷川憲一君から、活字文化に関する温言に一同傾聴させられた(因みに本書は図書新聞で相当の評価を得た)また、大谷聖聖君からは、郷土史家の

中畦一誠君の旧日野沢村と秩父事件との関わりを詳述した「やまなみ 残照」の上梓が近いことが報告されて、一同から大きな期待が寄せられた。両著作について説明するに充分な紙幅を持たないが、本紙読者各位に是非一読をお薦めしたい。

交歓は果てること知らなかったが十四時、小久保元音楽部長のリードで熊中・熊高両校歌が高らかに斉唱され(熊高一三年の歴史の中で敗戦に捩る学制改革に遭い、六年間在学して両校歌が歌えるのは、我々を含めて僅か四世代しか存在しない)岡田喜好君の閉会の辞を以て終了し、恩師を囲んで二次会場へ向かった。しかし仄閑するに、続いて四次に亘って旧交を暖めた云々豪傑達が居た云々から驚く。我等熊校健児の後期高齢者群は斯くも健在である。

還暦同窓会のお知らせ
高19回卒 加藤 博
昭和四十二年卒業生第五回同窓会を還暦になった年に盛大に楽しく開催する予定です。「学校へ行こう」がテーマです。恩師の先生にも御参加いただけるようお願い申し上げます。同窓生の皆様の御出席を世話人一同お待ちしております。日時二〇〇九年五月十日(日)午前十一時より、場所は熊谷高校内同窓会館(くぬぎ会館)です。間近になりましたらハガキにてご案内いたします。世話人会連絡先

来体 総玉 08 彩

地元埼玉県開催の全国高校総合体育大会に、ソフトテニス部高柳洋資(3年・中村圭介)3年ペアと、山岳部が晴れの出場を果し活躍した。おめでとう！
「Kizuna活動」に参加した、定時の山ノ内早苗さんに、感想を書いて頂いた。

楽しんだ夢舞台

ソフトテニス部

中村 圭介

インターハイ予選、僕達(高柳・中村組)は順調に勝ち進んでいました。ベスト16決めの時、4ゲーム先取の試合で、相手に2ゲーム先取されてしまいました。通過点と想っていただけに、焦っていました。気持ちで負けていました。それでもゲームを奪い返しましたが、そこで、雨のために中断し、延期になりました。恵みの雨でした。数日後、試合が再開され、逆転勝ちすることができました。次のインターハイ決めの相手は、以前一度負けていた強敵でした。一進一退の攻防の中、巡って来たマッチポイント、僕のレシーフでした。中途半端は一生後悔すると思い、思いっきりラケットを振りました。そのボールを相手の後衛がアウトとしてゲームセット。最高の瞬間でした。勢いに乗りの試合も勝ち、3位でインターハイ出場の切符を手に入れました。

インターハイでは、とにかく楽しむだけを考えました。念願の夢舞台、地元開催ということもあり、大声援の中で試合ができたことは、ものすごく嬉しかったです。そんな声援の後押しもあって、4回戦まで勝ち進むことができました。今まで支えてくれた両親や顧問の先生、共に練習してきたテニス部の仲間感謝しています。これからの熊高ソフトテニス部にも大いに期待しています。

埼玉インターハイに参加して

山岳部 坂本 聖也

今回のインターハイは地元ということで、開催地の山は以前に何度か行ったことがあり、下見準備としては最高の形で大会に挑むことができました。しかし、全国の壁は厚く、昨年以上の点数を出したものの、順位は少し落としてしまいました。改めて登山の厳しさを痛感しました。大会は、四人で一パターで常に一緒に行動し、審査中は顧問との接触が許されない厳しい状況で進行しました。しかし、そんな中でも、他校とのふれ合いを目的とする「交流会」が行われて楽しい時間もありました。

この大会は審査によって各高校の総合得点で勝敗を決めるので、筆記テストもあります。もしかしたら、すべての大会の中で、この登山大会が一番学力的に高

